

朝倉雅史 著『体育教師の学びと成長—信念と経験の相互影響関係に
関する実証研究—』—学文社、2016年—

筑波大学大学院 中村 映子

1. 本書の目的と全体構成

本書は、「体育教師が信じていることを『信念』という概念で捉え、信念はどのように形づくられ維持・強化されるのか、そして、どのように揺らぎ変容するのかを『経験』との関係に着目して明らかにしたものである」（まえがき）。著者が2015年3月、筑波大学により博士学位を授与された学位論文「体育教師の成長と学びに関する研究—信念と経験の相互影響関係に着目して」を加筆・修正し、日本学術振興会平成28年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の助成を受けて刊行された。本書の目的は、「信念の形成・維持・変容が教師の成長における重要な局面であることを踏まえ、信念のダイナミズムに影響を与える学習経験を突き止めることによって、体育教師の成長を支え促す学習・研修環境の構築に資することにある」（まえがき）。

本書は4部構成、本文は330頁のボリュームある内容となっている。特に、序論部に全体の約三分の一の紙幅を割いていることが注目される。全体構成は下記の通りである（節以下は省略）。

序論部 本研究の目的・先行研究の検討・研究方法（1～114頁）

序章 研究目的

第1章 先行研究の整理と検討

第2章 研究方法

第I部 体育教師による信念の問い直しと変容の難しさ（115～184頁）

第3章 体育教師の学びと学習環境の実態

第4章 実践において表出する信念の形成過程と維持要因

第5章 体育教師による信念の問い直しの難しさとその要因—フェーズⅠのまとめ

第II部 体育教師による信念の問い直しと変容の実相（185～310頁）

第6章 信念の内実と変容の様相—授業観に着目して

第7章 経験の受け入れと変容に影響を及ぼす信念

第8章 信念に影響を及ぼす経験と教訓の抽出と検討

第9章 体育教師による信念の問い直しと変容の実相—フェーズⅡのまとめ

第III部 体育教師による信念の問い直しと変容に有効な学習環境（311～330頁）

第10章 信念の問い直しと変容を促す学習環境—総合考察

終章 本研究のまとめ

以下では、まず本書の各章の概要を示した上で、評者が理解した範囲で本書の意義と課題について考察したい。

2. 概要

(1) 序論部

序論部は、体育教師が自らの信念に固執し、社会的・時代的な価値志向と個人的な信念とのやり繰りが生じていないという問題点を踏まえて体育教師の専門性として教師自身が信念を問い続け、変容させていく必要性を指摘し、研究の目的と3つの課題、先行研究の検討、研究方法について論じている。

序章では、体育教師の成長を「実践的知識の形成」に求めたとき、それらを根底で規定している信念が重要な役割を果たすが学校教育活動は社会的な営みであるため、個人的な信念と社会的な要請とのやり繰りをしていく中で、信念を問い直し必要に応じて柔軟に変容させていくことを体育教師の成長と捉えている。そのような体育教師の成長を支える学びと学習環境の在り方を検討するために「信念と経験にみられる相互影響関係の検討を通じて、体育教師の信念の構造と機能を明らかにし、体育教師が自らの信念を問い続けていくために有効な学習や研修の在り方を批判的に検討する」ことを研究目的としている(17頁)。そこでは3つの問い(①体育教師の信念は問われがたく、変容しがたいのか?それはなぜか?、②体育教師の信念はどのように問い直され、変容するのか?、③体育教師の信念の問い直しや変容にはどのような学習環境が有効か?)が設定され、それら3つのフェーズに沿って実証研究を展開していく枠組みが示されている。また、研究方法論は、「問題解決を志向する実用主義の認識論に立脚」し(22頁)、量的研究と質的研究を組み合わせた「混合研究法(Mixed Method)」(18頁)であると述べている。

第1章では、先行研究について、体育経営学における体育教師を対象とした研究、教師の信念や教師の成長・発達過程に関する研究、教師の学習を支えるシステムに関する研究の観点から検討している。体育経営学における体育教師に関する先行研究レビューでは、学校体育経営研究における人的資源マネジメント論を展開する必要性とそれが学校体育経営の環境適応とイノベーションにとって重要な課題であることを論じている(第1節)。教師の信念に関する先行研究レビューでは、まず教師の意思決定研究と知識研究の展開を整理することで信念研究の意義を明確にした上で(第2節)、実証的研究を次のように整理、検討している。教師の信念と行動の関係は直線的に結びつけられないこと、心理学的知見に基づいた詳細な概念規定が必要であること、教師は複数の対象について信念を有しているため信念を構造化された体系として捉える必要があること、問い直しや変容を促す信念と固執や硬直化を助長する信念が併存すること、が示されている(第

3節)。教師の成長・発達過程に関する先行研究の検討では、教師の成長・発達を信念の形成や変容として捉えること、および信念の形成や変容に影響を与える要因を入職前後を通じた経験から明らかにしていく必要があることを指摘している(第4節)。教師の学習を支えるシステムに関する先行研究の整理では、教師の省察と研修に関する先行研究の検討から、信念の形成や変容には自身の信念を問い直す深いレベル(高次)の省察をもたらすような学習環境の改善が課題となることを述べている(第5節)。

第2章では、研究方法について、信念概念の検討、学習と経験の分析視角、分析枠組みの構築、本書の研究の意義等の観点から説明がされている。まず、これまで曖昧であった教師の信念概念を心理学(社会心理学)の知見を援用することで詳細に規定することを試みている(図2-1・2-2:84頁、表2-2~2-5:85-89頁)。次いで、「授業観」「研修観」「仕事観(教師観)」の3つの信念を中心とした体育教師の信念体系を踏まえた上で、先行知見の「研修経験」「成長経験」に加えて「入職前経験」から「入職後経験」に至る長期的な経験、「一回り成長した経験」を導入することにより、多角的な分析枠組みを明示している(「図2-4」:105頁)。さらに、この枠組みに基づき、信念と経験の相互影響関係を検討する5つの実証研究を第I部・第II部のフェーズで展開する分析視点と第III部の総合考察の視点を提示している(106-108頁)。そしてこれらに加えて体育教師の成長と学びに関する社会的・実践的意義、大学における現職研修についての実践的示唆を提示することが本書の研究の意義であると述べている。

(2) 第I部

第I部は、「体育教師の信念は問われがたく、変容しがたいのか?それはなぜか?」という問いのもと、体育教師の信念の問い直しと変容に関わる実態把握から問題状況を明らかにする2つの実証研究について論じている。

第3章では、体育教師の信念(授業観)と学習・研修の実態を把握し、体育教師の学びと成長に関わる問題状況と課題を把握するため、授業観の変容、学びの中心となる省察の実態、それらを支える研修機会への参加と態度および研修観について定量調査に基づく分析と考察を行っている。その結果、以下の状況が明らかにされている。入職後の体育教師の授業観の変容はおよそ半数の教師にしか起こっておらず、経験年数と授業観の変容には強い関連があるとはいえない。また体育教師の省察として技術的・実践的省察と前提の省察の存在が示され、いずれの省察も経験年数を積むことで自動的に促されるものではない。研修機会への参加状況については全体的に停滞しており、体育教師の学習機会は同僚体育教師との情報交換や個人的な学習に限定されている。研修観の実態は、多くの体育教師が短期的・即効的・自己完結的な研修観を有していた。以上の結果から体育教師の信念の問い直しや変容は起こりがたく、それを支える学習と研修環境は改善を要すると述べている。そして、教師の実践現場における多様な経験を視野にいれて信念の変容が起こりがたい要因を究明していく必要性があると述べている。

第4章では、2名の体育教師の実践における信念の表出と形成過程をライフヒストリー分析を含むエスノグラフィックな事例研究に基づき検討している。その結果、現場に固有の信念は行為主体が持つ多元的目標の表層的な統合に寄与する一方で、彼らの価値観に関わる信念を個人に帰属したままにし、参加目的間のコンフリクトを潜在化させる機能を持つとされる。そのため、学校現場においては、目の前で起こっている事実の認識と切迫した問題認識から形成された信念が共有されることにより、個々の教師の価値観に関わる信念の省察が妨げられる「信念共有のジレンマ」ともいえる状況が生起していると指摘している。

第5章は、第I部のまとめの解説と考察である。第3章および第4章の分析と結果を踏まえて、体育教師の信念の問い直しとその難しさを入職前の予期的社会化過程との関連から次のように考察している。体育教師は幼少期のスポーツ環境における経験から現在に至る長期的経験によって強い信念を形成・維持してきたといえ、そのプロセスに体育教師の信念を問われがたくする以下の2つの要因がある。第一に、体育教師としての信念形成過程の時間的な長さである。第二に、信念を強化する経験が運動やスポーツを核とした環境において生じていることである。このような問題状況の中で、いかにして体育教師の信念は問い直されるのかを第II部で、実証的に究明していくとしている。

(3) 第II部

第II部は、「体育教師の信念はどのように問い直され、変容するのか?」という問いのもと、体育教師の信念の変容はどのような信念と経験の影響関係によって生じるのかを3つの実証研究に基づき検討している。

第6章では、体育教師の職務の中心的な信念といえる授業観の構造および変容の様相を明らかにするために、質問紙調査の内容分析(テキストマイニング)に基づき検討している。そこでは、授業観が変容した体育教師と変容していない体育教師の授業イメージの比較、及び授業イメージに影響を与えた経験等との関連を分析している。その結果、体育教師の授業観は入職前の経験に影響を受けている「規律・態度志向」および「運動量・安全志向」から入職後の経験に影響を受けた「協同的学習志向」へ変容すること、授業観の変容が入職前の経験と入職後の経験が対立的に影響し合う綱引きのような関係の中で生じること、を指摘している。

第7章では、前章の授業観の変容が入職後の経験に影響を受けるという結果を踏まえて、経験からの学習を促進・阻害両面で規定する信念を明らかにするために定量調査に基づく分析と考察を行っている。そこでは、体育教師の「経験から学習する能力」(219頁)を実証するため、「教師イメージ」および「仕事観(仕事の信念)」の構造と機能に着目している。その結果、「教師イメージ」については、「管理者型」と「支援者型」という2つのタイプ、「仕事の信念」については「自己実現型」「生徒重視型」「開放的信念型」「独善型」「閉鎖的信念型」という5つのタイプに類型化され、体育教師の成長にとっては「支援者型」と「開放的信念型」の信念が重要である

と示唆している。そして、体育教師の専門職としての誇りともいべき開放的な仕事の信念が、成長経験の積極的な受け入れを促進すること、一方で体育教師が有する専門的閉鎖性を中心とした閉鎖的な信念および教職経験年数の蓄積が成長経験の受け入れを阻害すること、を指摘している。しかし、本章での定量的な分析は、信念の構造や機能の一般的な教師類型を提示するのに有効であるが、信念の形成・変容にみられる動態を捉えるには限界があると述べている。

第8章では、これまでみてきた「授業観」「仕事観」「研修観」に影響する経験を多角的に捉えるため、「一回り成長した経験」とそこから学んだ「教訓」の抽出（研究1）、および長期研修に参加した体育教師の事例研究（研究2）を行っている。研究1では、体育教師が一回り成長したと思った「経験」とそこから学んだ「教訓」を描き出し、概念とカテゴリーのレベルで出来事と学んだことを整理・分析している。その結果、まず異質な他者との交流や自身の実践や考え方を公開することで、自らのものの見方・考え方を相対化するような研修経験が、体育教師の授業観・研修観・仕事観をはじめとした信念の問い直しと変容を促すことを指摘している。また、そのような経験が生じる機会として、勤務校を超えた非日常的・長期的な研修活動が重要な学びとなることを示唆している。研究2では、このような研修機会として大学における長期研修を経験した体育教師の事例研究を通じて、信念の問い直しや変容を促す学びのプロセスを明らかにすることを試みている。その結果、体育教師の信念変容は、授業観・仕事観・研修観とその他の信念が連動する形で生じる漸次的な信念体系全体の変動として捉えられることが明らかにされている。その信念変容をもたらす経験は、「知識の生産プロセスに携わる学び方の学習経験」を核とし、「理論的知識や客観的情報に触れる経験」を契機として生じていること、さらに「物理的・時間的・人的な境界を越境する経験」によって支えられていること、が示されている（図8-3：297頁）。

第9章は、第Ⅱ部のまとめの解説と考察である。ここで付記しておきたい著者の考察は次の2点である。第一に、第6章で明らかにされた授業観の変容の道筋は一般教師研究の知見と一定程度重なるものの、体育教師は、経験年数を積み重ねることによって自然に授業観が変容していくわけではなく、信念は入職以前から比較的強固に形成され保持され続けているという第Ⅰ部の結果を支持する知見の提示である。第二に、このような状況にある体育教師が自らの信念を問い直す学習環境として、第8章で検討した長期に現場を離れる「越境経験」の有用性を強調している点である。

（4）第Ⅲ部

第Ⅲ部は、「体育教師の信念の問い直しや変容には、どのような学習環境が有効か？」という問いのもと、実証研究の知見を踏まえた統合的な考察を行い、体育教師の信念の問い直しに有効な学習環境を考察している。

第10章では、①体育教師の信念の問い直しには、実践現場では生起しがたい越境経験を契機とした「自己決定型学習」（クラントン）が重要であること、②その学びをもたらす学習環境とし

て、大学における長期研修を通じた越境経験は、自らの信念が形成されてきたプロセスと要因を問い続ける「自己決定型学習」の経験であること、③そこでの学びは、ある価値志向を内包した社会的要請と自らの経験によって形成してきた信念との間でジレンマをやり繰り返す体育教師の成長・発達にとって重要な学びとなること、の3点を示唆している。しかし一方で、長期研修の制度は希少性や限定性が高く、すべての教師に保障することは現実的には難しいという問題があるため、日常的な場における信念の問い直しを促す実践的示唆として以下の3点を提示している。第一に中学校・高等学校における「教科横断型研修」の構築、第二に小学校・中学校・高等学校が協同で行う「異校種縦断型研修」の構築、第三に「大学との連携による研修」の構築である。

終章では、全体の知見のまとめと共に今後の課題が示されている。本書の実証研究から導き出された新たな知見としては以下の5点が挙げられている。第一に、体育教師の信念と経験の相互影響関係が実証的に明らかにされたこと、第二に、体育教師の成長と学びにとって特に入職後の経験を積極的に受け入れることが重要であること、第三に、「授業観」「研修観」「仕事観」を含めた信念の問い直しを促す高次の学びは、越境経験を契機としたジレンマが継続的・持続的に引き起こされる自己決定型学習に見いだされること、第四に、信念の変容のプロセスは自らの信念とその形成過程を問い直す中で、信念体系が漸次的に変動する過程であること、そして第五に、自己決定型学習を促す「大学における研修」の有効性が示唆されたこと、が述べられている。最後に、本研究の課題として、①体育教師の信念を「信念体系」として明らかにすること、②個別事例を対象とした詳細な研究の展開、③体育教師の信念の問い直しや変容に関する介入的研究の必要性、④越境経験と自己決定型学習を経験した体育教師が学校現場に戻り、いかなる実践を展開していくかの検討、の4点を挙げている。

3. 若干の考察

(1) 本書の意義

本書は2016年度「日本体育・スポーツ経営学会 学会賞」を受賞している。この点を鑑みれば、学術的に優れた内容であることが学界から高く評価されているのであり評者の論じるころは少ないと思われるが、あえて感想を交えて読み取った意義と若干の課題に言及しておきたい。

本書を通読してまず感じた印象は、「学際的な議論の展開」「多角的な分析方法による精緻なデータの収集・分析」「記述の分厚さと丁寧さ」である。序章から終章に至るまで、国内・外の文献を駆使し、多様な分析データ（エビデンス）に基づき、一つひとつ根拠を明らかにしながら丁寧に論じている。その文脈には、著者自身の「学部卒業時、それまで運動やスポーツに没頭し、時には依存しながら歩んできた自分の人生に疑問を持ち、立ち止まるための余裕を求めて大学院に進学した」（あとがき）という生き方や思いが重なっていると感じられた。つまり、著者自身もそれまでのスポーツ環境における経験から形成・維持してきた「自身の信念とは何か」を批判的に問い直す作業が「まさに苦痛を伴う『ジレンマ』」（あとがき）の体験として本書も含めた研究活

動において同時並行的に行われてきたことが推測されるのである。

本書の第一の意義は、著者自身がこのような背景と問いを内包しつつ体育・スポーツ経営学の分野に学問的アイデンティティの基礎を置き「体育学と経営学を中心とする関連研究を幅広く渉猟して分析枠組みをつくり、多角的な実証分析と考察を展開」（まえがき）している学際的研究にある。例えば、第7章における研究の枠組みに関して「教育心理学、(体育) 教師教育研究、経営学における人材育成研究にまたがる学際的なものである」（注1：238頁）と述べられているし、巻末の文献一覧（331～352頁）を見れば一目瞭然である。今日、とりわけ教育に関する問題は専門化、細分化を進行させた学問のみではとうてい対処できず、学校現場と社会の双方から学際的研究が求められている。評者は学級経営と若手教員の職能発達との関連を追究する研究を行っているが、教育の現場から提起される現象に向き合い、「問題の解決と改善に向けた具体的な方策を提示しようとする」（111頁）ならば、学際的な研究を射程に入れることが当然求められると考える。したがって、著者の学際的な知見の広さと深さに圧倒されつつ、研究的刺激と学びを大いに受け、感服している。これまで体育教師が置かれている問題の現象の把握と理解に資する実証的研究はほとんどない（17頁）状況での本書の意義が高く評価される。

第二の意義は、「多角的な分析方法による精緻なデータの収集・分析」に基づいて体育教師の信念の構造と機能を明らかにし、信念の問い直しや変容に有効な学習や研修の在り方を考察している点である。具体的には、「授業観」「研修観」「仕事観」の3つの信念と「研修経験」「入職前経験」「入職後経験」「教師の成長経験」「一回り成長した経験」の5つの経験に着目し、信念と経験の相互影響関係の検討を通じて考察を行っている。説得力のある学際的な研究として成功している要因としても、研究の方法に注目しておかなければならないだろう。それは、冒頭でも触れたように序論部のボリュームの分厚さとなってあらわれている。しかし一方で、読む者にとっては多少分かりづらさを感じる。そこで、表にして概要を整理しておく。

表 本書における研究方法の概要

章	研究の目的	研究の方法	データの収集に関する情報
第3章	体育教師の信念と学習・研修の実態把握、問題状況と課題の把握	質問紙調査と定量分析	2014年2～3月、有効サンプル数552部（公立中学校：252／公立高等学校：300、回収率27.6%）
第4章	「強い信念」がいかに形成され、どのように実践現場で表出・維持されるのかを描出	エスノグラフィー（参与観察、非構造的インタビュー、ライフストーリー分析）	X高等学校の保健体育科教員2名の事例
第6章	体育教師が保有する授業観の構造とその変容の様相の検討	自由記述式質問紙調査の内容分析（テキストマイニング）	2011年3～4月、有効標本回収数244（公立中学校および高等学校の保健体育科教員、回収率12.2%）
第7章	経験からの学習を促進・阻害両面で規定する信念の検討	質問紙調査と定量分析	2011年3～4月、有効標本回収数634（公立中学校および高等学校の保健体育科教員、回収率31.7%）
第8章	体育教師が有する信念の問い直しや変容に関わる場と学びの抽出、その学びが生じる環境とプロセスの検討	<研究1> 定量分析、質的研究法（M-GTA） <研究2> 半構造化インタビュー、ライフストーリー	<研究1> 第6章のデータを使用 <研究2> 2014年7～9月、公立中学校・高等学校の保健体育科教員5名の事例（中学校3名、高等学校2名）

(2) 課題

最後に、疑問点も含めて若干の課題を2点挙げておきたい。第一に、体育教師の「信念」と「教科アイデンティティ」の関連を著者はどのように捉えているのか／いないのかという疑問である。本書の研究対象は、「中学校・高等学校（中等教育段階）の教科専門性を有する保健体育教師である」（注3：23頁）。著者は体育教師が置かれている周辺性や生徒指導的な役割期待などの問題を挙げ、そのような「体育教師を取り巻く問題状況を鑑みると、その専門性の保障と向上は喫緊の課題」（14頁）であるとしている。だとするならば、「信念」と「教科アイデンティティ」の関連も論じて欲しかったと思うのである。しかし、本書では、「教科アイデンティティ」というワードは一切出てこない。また、「アイデンティティ」のワードは散見されるが、例えば「体育教師にとって自らのアイデンティティや存在に直接関わりと推論される『自己および指導における自らの役割についての信念』（217頁）などの記述であり、「教科の専門性」との関連は不明である。評者は個人的には、第8章の5名の保健体育科教員の事例（上掲「表」参照）が興味深く、体育教師ならではの教科の専門性やアイデンティティに関わる揺らぎや学びと成長が捉えられた。ここで先行研究の例を挙げる紙幅はないが、例えば村井（2014）は高等学校の社会科教師の教科アイデンティティの問題を論じており、重要な概念であることは間違いないだろう。

第二は、第10章で提示された3つの実践的なインプリケーション（①「教科横断型研修」②「異校種縦断型研修」③「大学との連携による研修」の構築）の内容の物足りなさである。著者は、これまで体育教師に対する批判が現象の説明と実証的なデータをもとに展開され、問題解決に資する具体的に有効な方策の提示はほとんど行われてこなかったことを批判し、経営学的な視点に立ち、問題の解決と改善に向けた具体的な方策を提示する点に本書の意義を置いている（111頁）。しかし「信念の問い直しを促す高次の学び」は、「学校現場において生起させることが難しい」（328頁）と結論を示唆しながら、大学における長期研修制度の脆弱性から提示した具体的な方策としては説明と論拠が不十分であると感じざるを得ない。①は保健体育科教員としての教科の専門性や教科アイデンティティが関わってくるだろうし、②は特に小・中学校の現場ではかなり以前から実践されてきた歴史があるが形骸化の指摘もある。③は大学改革がもたらす現況を鑑みると、その在り方に関して十分な議論が望まれる。加えて、著者の「本書が対象とする研究領域が曖昧な印象は免れないかもしれない」（まえがき）との言及を踏まえても、提示された3つの実践的示唆は一般的な教師研究への示唆とも解釈でき、物足りなさを感じるのである。

とはいえ本書は、著者の意図の通り「体育教師研究としてのみならず、教科に限定されない一般的な教師研究に資する」（まえがき）優れた学術図書として、広く読み継がれていくと思う。

引用文献

村井大介「カリキュラム史上の出来事を教師は如何に捉えているか—高等学校社会科分化の意味と機能—」『教育社会学研究』第95集、2014年、67-87頁。